

現代文語アラビア語における 動詞派生形第V形の意味機能再考

佐 藤 道 雄

1. はじめに

アラビア語では動詞の語根に「派生形」のパターンを適用することで、使役、他動詞的な語根の自動詞化、「互いに～する」の意味の付加など、様々な文法的・意味的な拡張を付け加える。

しかしながら、日本語での助動詞にも相当するようなこの派生形のパターンは、本稿の対象とする現代文語アラビア語では「基本形（またはI形）」から「X形」までの10種類しかなく、しかも派生形パターン同士の組み合わせもできない。そのため、一つ一つのパターンが複数の意味機能を担うことになり、何かの派生形を説明しようとする、例えば「第II形の意味機能は、(1)意味の強化「激しく/何度も～する」、(2)自動詞の他動詞化、(3)使役、(4)他動詞の二重他動詞化、(5)宣言・判断「～を～すると見なす」、(6)名詞の動詞化（以上、黒柳・飯森に基づく）」などのように、互いにあまり関係のない意味機能の説明が並ぶことになる（但しこの例では(2)(3)(4)は「日本語『～させる』に相当」で済ませられるように筆者には思われるが）。

このように意味機能の説明が煩雑になりがちな派生形であるが、これを用いなければ「～しようとする」ḥāwal-a (III形)、「伝える」ʔaḥbar-a (IV形)、「話す」takallam-a (V形)、「使う」istaḥdam-a (X形) などのような日常的な表現もできないため、初学者にとっても派生形の学習は不可欠である。そこで、派生形をどうやって整理して提示していくかの工夫や苦勞が学習書や文法書には見られる。

本稿では、従来の文法書・学習書に見られる派生形第V形の「自ら/意志で/意識して/努力して～する」という意味機能を、新たに「動詞の具体性・動作性を低くする機能」と代えることにより、より多くの動詞を説明できるということを提案する。

まず、派生形の形式的なパターンとそれぞれの意味を概観し、その後、各文法書・学習書での第V形の扱いを提示・考察する。そして、「動詞の具体性・動作性を低くする機能」を新たに提案したい。

2. 派生形概観

派生形は形式的には明解なパターン（つまり「この動詞は何の派生形だろうか？」という疑問があまり起きない形式）と、あまり釈然としない意味機能（つまり「この語根とこの派生形が結びつくとなぜこんな意味になってしまうのか？」という疑問を引き起こしやすい）とが結びついたものである。以下、形式と意味機能を概観する。なお、以下でのアラビア語の転写では同じ音価の子音字でも、便宜上、語根を表すのに「大文字」を用い、語根以外を表すのに「小文字」を用いることにする。

2.1 派生形の形式

以下に、派生形の「基本形（または第Ⅰ形）」から「第Ⅹ形」までの10パターンを示す。表では慣例に従って、日本語「する」に相当する語根 F-ε-L を用いている。

派生形	能動完了形 「彼は～した」	能動未完了形 「彼は～する」	受動完了形 「彼は～された」	受動未完了形 「彼は～される」
基本形	FaεaL-a ¹⁾	ya-FεaL-u ¹⁾	FuεiL-a	yu-FεaL-u
第Ⅱ形	FaεεaL-a	yu-FaεεiL-u	FuεεiL-a	yu-FaεεaL-u
第Ⅲ形	FāεaL-a	yu-FāεiL-u	FūεiL-a	yu-FāεaL-u
第Ⅳ形	?aFεaL-a	yu-FεiL-u	?uFεiL-a	yu-FεaL-u
第Ⅴ形	taFaεεaL-a	ya-taFaεεaL-u	tuFuεεiL-a	yu-taFaεεaL-u
第Ⅵ形	taFāεaL-a	ya-taFāεaL-u	tuFūεiL-a	yu-taFāεaL-u
第Ⅶ形	inFaεaL-a	ya-nFaεiL-u	(自動詞だけなので受動態なし)	
第Ⅷ形	iFtaεaL-a	ya-FtaεiL-u	uFtuεiL-a	yu-FtaεaL-u
第Ⅸ形	iFεaLL-a	ya-FεaLL-u	(自動詞だけなので受動態なし)	
第Ⅹ形	istaFεaL-a	ya-staFεiL-u	ustuFεiL-a	yu-staFεaL-u

* 1) 基本形能動態に限って語根第二子音（表の例ではε）の後の母音が動詞によって a, i, u のいずれかになる。上記の例「する」では FaεaL-a / ya-FεaL-u だが、例えば「書く」ならば KaTaB-a / ya-KTuB-u に、「飲む」ならば ŠaRiB-a / ya-ŠRaB-u に、「行く」ならば DaHaB-a / ya-DHaB-u に、それぞれなる。

上の表では能動態・受動態ともに、完了形ではハイフンの後が、未完了形では二つのハイフンの前と後ろとがペアで、数・人称・性による活用の部分を表す。実際には一つの動詞につき活用形が13ずつあるが、表ではそれらを代表して単数・三人称・男性「彼は～した / する / された / される」のみを示している。

2.2 それぞれの派生形の意味機能

ここでは学習書の中では文法の説明が比較的詳しい飯森・黒柳『現代アラビア語入門』での例を見てみたい。

第Ⅱ形

- (1) 原形の意味の強化 ḌaRaB-a 「打つ」 → Ⅱ ḌaRRaB-a 「激しく打つ」
- (2) 自動詞の他動詞化 FaRiḥ-a 「喜ぶ」 → Ⅱ FaRRaḥ-a 「喜ばす」
- (3) 使役の意味 ḤaMaL-a 「運ぶ」 → Ⅱ ḤaMMaL-a 「運ばせる」
- (4) 他動詞の二重他動詞化 ʿaLiM-a 「知る」 → Ⅱ ʿaLLaM-a 「教える」
- (5) 宣言、判断の意味 KaḌaB-a 「嘘をつく」 → Ⅱ KaḌḌaB-a 「嘘つきだと思う」
- (6) 名詞から作る ḤaYMat-un 「天幕」 → Ⅱ ḤaYYaM-a 「テントを張る」

第Ⅲ形

- (1) 試み QaTaL-a 「殺す」 → Ⅲ QāTaL-a 「殺そうと努める、戦う」
- (2) 誰々に (と) ～する (相互性、前置詞不要)
KaTaB-a 「書く」 → Ⅲ KāTaB-a 「誰々に手紙を書く」

第Ⅳ形

- (1) 自動詞、他動詞の使役化、二重他動詞化
JaLaS-a 「座る」 → Ⅳ ?aJLaS-a 「座らせる」 ʿaLiM-a 「知る」 → Ⅳ ?aJLaS-a 「知らせる」
- (2) 名詞から動詞に派生 MaṭaR-un 「雨」 → Ⅳ ?aMṭaR-a 「雨を降らす」

第Ⅴ形

- (1) 第Ⅱ形の再帰形 KaSSaR-a 「粉々にこわす」 → Ⅴ taKaSSaR-a 「粉々にこわれる」
- (2) 自己主張 KaBuR-a 「大きくある」 → Ⅴ taKaBBaR-a 「自分を偉いと思う、高慢である」
- (3) 名詞からの派生 NaṢRāNiy-un 「キリスト教徒」 → Ⅴ taNaṢṢaR-a 「キリスト教徒になる」

第Ⅵ形

- (1) 第Ⅲ形の再帰形 BāʿaD-a 「遠ざける」 → Ⅵ taBāʿaD-a 「遠ざかる」
- (2) 相互作用 QaTaL-a 「殺す」 → Ⅵ taQāTaL-a 「互いに戦う」
- (3) ～のふりをする MāT-a (<*MaWaTa) 「死ぬ」 → Ⅵ taMāWaT-a 「死んだふりをする」

第Ⅶ形

- (1) 基本形の再帰形 KaSaR-a 「こわす」 → Ⅶ inKaSaR-a 「こわれる」
Qaṭaʿ-a 「断つ」 → Ⅶ inQaṭaʿ-a 「断たれる」

QaLaB-a 「ひっくり返す」 → VII inQaLaB-a 「ひっくり返る」

第Ⅷ形

- (1) 基本形の再帰形 JaMaE-a 「集める」 → VIII iJtaMaE-a 「集まる」
- (2) 相互的働き HaSaM-a 「争う」 → VIII iHtaSaM-a 「互いに争う」
- (3) 自分のために～する KaSaB-a 「獲得する」 → VIII iKtaSaB-a 「自分のために獲得」

第Ⅸ形

色彩や肉体上の欠陥（きわめて少ない）iHMaRR-a 「赤くなる」

第Ⅹ形

- (1) 第Ⅳ形の再帰形 ?aEaDD-a 「準備する」 → X istaEaDD-a 「準備できている」
- (2) 判断評価 WaJaB-a 「必要である」 → X istaWJaB-a 「必要と思う」
- (3) 懇願依頼 ?aDiN-a 「許す」 → X ista?DaN-a 「許しを求める」
- (4) 名詞からの派生 EaBD-un 「奴隷」 → X istaEBaD-a 「奴隷にする」

以上が、飯森・黒柳に見られる各派生形の意味機能の説明である。飯森・黒柳では、それぞれの各派生形の意味機能の説明の後に実際の動詞を例にした活用表が続き、その後でそれぞれの派生形が用いられている動詞の例を、その派生形の意味機能のうちどれが適用されているかを説明することなしに提示している。例えば第Ⅴ形の動詞の例は以下のとおりである。

taKaLLaM-a 話す	taQaDDaM-a 進歩する	taLaFFaZ-a 発音する
taBaSSaM-a 微笑する	taNaFFaS-a 呼吸する	taNaZZaH-a 散歩する
taMaTTaE-a 楽しむ	taEaHHaD-a 企てる・着手する	taMaKKaN-a できる
(以下「不規則動詞」)	taLaQQā 受け取る	taWaLLā 管理する
taWaJJaH-a 向かう	taHaYYaR-a 選ぶ	taTaWWaR-a 展開する
taEaWWaD-a 慣れる	taTaWWaE-a 志願する	tuWuFFiY-a 没する（受動態）

これを見て、例えば taMaTTaE-a 「楽しむ」は MaTTaE-a 「楽しませる」という第Ⅱ形の動詞があって、その再帰の意味ではないか、とか、taEaŠŠā は何か「夕食」という名詞が元になっているのではないかと仮定し、辞書で確認することはできるが、同様に全ての例を一つ一つ上記説明の(1)第Ⅱ形の再帰 (2)自己主張 (3)名詞からの派生 のどれかに当てはめることは難しいと思われる。

これはこの教材の欠陥とは言えない。実際に全ての動詞に摘要できるような派生形の意

意味機能の分類は無理である。そこで、辞書でも語根の見出し語の後に下位分類として一つ一つ「この語根での第Ⅱ形は...、第Ⅴ形は...、第Ⅹ形は...」と意味を提示している。

また学習書でも、「派生形はあるけれどもどんな意味になるかは動詞によって異なるので、派生形の意味機能は（あまり深く）考えないで、とにかく形を覚えたほうがいい。」

（Beeston、Cowan、榮谷）というものや、派生形の意味機能は分類・説明しているが、それぞれに該当する少数の動詞のみを提示しているもの（池田。学習者は自分でアラビア語を読み始めると、著者の派生形の説明に該当しない動詞に多数出会うことになる）など、派生形の意味をどれぐらい詳述しているかは、教材や文法書によって大きく異なる。

筆者自身もアラビア語の授業では「派生形はそれぞれに意味的な傾向はあるけれども、全ての動詞に教科書どおりの意味機能のどれかが当てはまるとは考えない方がいい。また、派生形の中には第Ⅲ形（人に対して～する・しようとする）や第Ⅵ形（互いに～する、だんだん～する、～して見えるようにする）のように比較の意味がわかりやすいものと、第Ⅴ形や第Ⅷ形、第Ⅹ形のように元の語根との意味の関係がよく分からないことが多いものもある。でも形だけは覚えなければならない」としか言えないでいる。

3. 派生形第Ⅴ形の意味機能についての各文法書・学習書の説明

ここでは対象を第Ⅴ形に限定し、いくつかの教材でどのように意味機能を説明しているかを見てみたい。次のリストは、筆者が調べたそれぞれの文法書・教材で第Ⅴ形の意味機能がどのように分類・説明されているかを①、②、③などの番号の後に示し、実際に提示されている例の数を括弧の中に示した。また、スラッシュ / の後の数字は、第Ⅴ形の説明のところで分類されないままで提示されている動詞がいくつあるかを示している。

例えば「本田では第Ⅴ形を①第Ⅱ形の再帰（この意味での動詞の例4つ）、②「自ら～する」他（この意味での動詞の例6つ）の意味機能に分類しており、その後で意味機能ごとには分類されていない第Ⅴ形の例を30挙げている」「黒柳・飯森は第Ⅴ形を3つの意味機能に分類しており、それぞれ実際の動詞を1例ずつ提示。更に意味で分類されていない第Ⅴ形18例がリストされている」ということを示してある。

・ Beeston 「派生形は語彙ごとに辞書で確かめるべきもの」（意味機能の説明なし）

・ Cowan ①第Ⅱ形の再帰(2)

・ 榮谷 ①第Ⅱ形の再帰(3)

・ 奴田原 ①第Ⅱ形の再帰(1) /12

・ 本田 ①第Ⅱ形の再帰(4)

②「自ら～する」「自分自身で意識的に～する」

「自分の意志で～する」(6) /30

- ・ 八木・他 ①「苦勞して～する」(1) ②第Ⅱ形の再帰(1) /0
- ・ 黒柳・飯森 ①第Ⅱ形の再帰(1) ②自己主張(1) ③名詞からの派生(1) /18
- ・ 池田 ①第Ⅱ形の再帰(4) ②名詞の動詞化(2) ③(自己)推量(1) /0
- ・ 鈴木 ①第Ⅱ形の再帰(1) ②使役(1) ③名詞の動詞化(1) /0
- ・ 新妻 ①第Ⅱ形の再帰(5) ②名詞からの派生(3) ③自らを～と見なす(2) /11
- ・ Brockelmann ①第Ⅱ形の再帰(2) ②名詞の動詞化(3) ③～のように振る舞う(3) /0
- ・ Haywood 他 ①第Ⅱ形の再帰(3) ②質や状態を表す名詞の動詞化(2)
③自分を～とする(2) /0
- ・ 四戸 ①自動詞(0) ②他動詞(0) ③試み(0) ④名詞の動詞化(0)
⑤「～となる」(0) ⑥要求(0) /20

上記リストに関する考察

- 1) 四戸のみ他と全く異なった分類を行っていて、しかもそれぞれの意味機能についての実例がないので、後で例として挙げてある20語のリストがあまり役に立たない。
- 2) 鈴木のみに見られる②「使役」は、挙げられている唯一の例が taŠaJJaE-a「勇気つけさせる」だが、これは taŠaJJaE-a「勇気つけられる」(< 第Ⅱ形 ŠaJJaE-a「勇気づける」)の誤りと思われる。したがって「使役」ではなく「第Ⅱ形の再帰」として扱うべき。
- 3) 派生形V形の意味機能をまずひとつ挙げるならば「第Ⅱ形の再帰」となる。これに「名詞の動詞化」「自らを～と見なす」が続く。
- 4) 少数派ではあるが、二つの教材で「意識して～する(本田)」「苦勞して～する(八木他)」を挙げている。例として挙げられている動詞は同じではないが、筆者(佐藤)は、これは同じ意味機能と見る。(後述)

以上が各文法書・学習書に見られる派生形第V形の扱い方である。次に第V形の一つ一つの意味機能の説明の箇所ですべて実際に例示されている動詞を見てみたい。なお、それぞれの文法書・教材で第V形の意味機能ごとに分類されずに、ただ「第V形の動詞の例」のように挙げてある動詞(上記リストの斜ッシュ / の後の数字で示されている)は以下では挙げないが、これらは必ずしも分類が不可能なのでただ示してあるということではなく、どちらかと言えば、それぞれの筆者が知っている動詞の第V形を思いつくままにまとめて

一か所に書いたかのように見える。

次に、第V形の意味機能のそれぞれの説明の箇所を例として提示されている実際の動詞を見てみたい。「扱い書」の下の文字はそれぞれの文法書・学習書の筆者の頭文字である。

① II形再帰：

V形動詞の例	元になっているII形	扱い書
taD̥aKKaR-a 思い出す	< D̥aKKaR-a 思い出させる	hay
taZaWWaJ-a 結婚する	< ZaWWaJ-a 結婚させる	本
taŠ̥aRRaF-a 名誉とする	< Š̥aRRaF-a 名誉を与える	cow
taSaLLaM-a 受け取る	< SaLLaM-a 渡す	新
taɛaLLaM-a 学ぶ	< ɛaLLaM-a 教える	本 榮 bro hay 奴新 cow
taĠaYYaR-a 変化する	< ĠaYYaR-a 変化させる	本
taFaRRaQ-a 分かれる	< FaRRaQ-a 分ける	hay
taQaRRaR-a 決まる	< QaRRaR-a 決める	新
taQaT̥Taɛ-a 切れ切れになる	< QaT̥Taɛ-a 切れ切れにする	池鈴
taKaBBaR-a 自らを大きくする	< KaBBaR-a 大きくする	bro
taKaSSaR-a 粉々に壊れる	< KaSSaR-a 粉々に壊す	榮黒池八新
taKaLLaM-a (言葉を) 話す	< KaLLaM-a (人に) 話す	新
taWaJJaH-a 向かう	< WaJJaH-a 向ける	榮 / 向かう 池
taWaH̥HaD-a 一つになる	< WaH̥HaD-a 一つにする	本

②名詞の動詞化：

taNaŠ̥SaR-a	キリスト教徒(NaŠ̥RāNīy-un)になる	池黒鈴新 hay
taHaWWaD-a	ユダヤ教徒(yaHūDīy-un)になる	池新 hay
taMaŠ̥SaR-a	エジプト(MiŠ̥R)かぶれになる	新
taHaN̥NaT̥-a	罪(HiN̥T̥-un)から身を清める	bro
taNaJJaS-a	不浄(Na/iJS-un)を避ける	bro

③自分を～とする：

taKaBBaR-a	自分を大きい(KaBīR-un)と思う、威張る	黒池新 hay
taNaBBa?-a	自ら預言者(NaBīy-un)として振る舞う	新 bro hay

④「自ら～する/自分自身で意識的に～する/自分の意志で～する(本)」「苦勞して(八)」：

taHaMMaL-a	自ら～を担う、負う、耐える	(HaMaL-a(物を)運ぶ)	本
taHaRRaJ-a	卒業する(自ら勉学に学んで学校を出る)	(HaRaJ-a(物理的に)出る)	本
taDaH̥HaL-a	干渉する(自分自身を意識して～に入れる)	(DaHaL-a(物理的に)入る)	本
taFaTTaH̥-a	花が開く(花が自ら花卉を開く)	(FaTaH̥-a(物理的に)開く)	本

taMaŠŠā 散歩する(自らの気の向くままに歩く)	(MaŠā(単に)歩く)	本
taKaBBaR-a 傲慢である、いばる(自分自身を大きいと見なす)	(KaBuR-a 大きい)	本
taWaŠŠaL-a 到達する	(WaŠaL-a)着く、届く	八

4. 考察と筆者による第V形意味機能追加の提案

上記の動詞派生形第V形の意味機能の分類に関して気になるのが最後の④「自分で・苦労して～する」の部分である。まず taFaTTaḤ-a「開花する」は花の意志も苦労も表している訳ではないので、ここでの例としては不適切であろう。

さて、taFaTTaḤ-aを除外するならば、筆者は上記④のリストに更に似たような第V形の例を追加することができる。

V形動詞	対応する基本形動詞
taHaRRaB-a 逃げる、(義務や責任から)逃れる	(HaRaB-a(ある場所から)逃げる)
taMaLLaK-a 所有する、支配する	(MaLaK-a 所有する)
taWaQqaf-a 停止する、中止する	(WaQaf-a 停止する、立ち上がる)
taHaKKaM-a(ある地域を)支配する	(ḤaKaM-a 支配する、裁く)
taQaDDaM-a 発展する	(QaDaM-a 前進する)

表の左側の第V形は必ずしも「自分で」や「努力して」を表す訳ではない。

taMaLLak-a(「所有する、支配する」)の例:

al-ḥawfu -llaḡī taMaLLaKa-nī lam yaʿsud min-hu mazīdun.
 (定冠詞)怖れは(関係代名詞)支配した - 私を もはやない から - それ もっと・が
 私を支配した恐れはこれ以上はもうない。

(ディズニー映画 *Frozen* アラビア語バージョンの中の歌 *ʔatliqī sirra-ki* 歌詞)

主語の「怖れ」を極端に擬人化したのでなければ、それが自ら意識したり努力したりするとは考えられない。そうではなくて、これらのペアの例で指摘されるべき第V形と基本形(右側の括弧の中)との意味の違いは、むしろ右の基本形の方がより具体的(誰かが土地や自動車など所有する)で、左の第V形の方は具体性が低い(「怖れ」自体に主体性はないが、私が怖れのせいで自由ではない)ところにあると思われる。

同じ見方で上記の③「自分を～とする」④「自ら～する」「意識/努力して～する」をまとめてもう一度検討する。

V形動詞	対応する基本形動詞
taNaBBaʔ-a 自ら預言者として振る舞う:	(名詞 NaḡiY-un 預言者)
taḤaMMaL-a (責任や義務を)負う、我慢する:	ḤaMaL-a (物を)担ぐ、負う
taḤaRRaJ-a (学校を)卒業する:	ḤaRaJ-a (場所から)外に出る

taDaḤḤaL-a (何かの関係の中)に入る、介入する :	DaḤaL-a (場所に) 入る
taMašŠā (あちこち) 歩く :	Mašā (体の動作として) 歩く
taKaBBaR-a 大きいように振る舞う :	KaBuR-a (単に) 大きい
taWašŠaL-a (結果・結論に) 到達する :	WašaL-a (場所に) 到着する

このように第V形が表しているのは、意志や苦労というよりも、具体性が低かったり動作性が低かったりすることではないだろうか。

アラビア語の動詞の派生形は形式的には明解だが、それが何かの語根に適用されるとどんな意味になるのかはあまり明解ではない。筆者のここでの提案「第V形の適用により、具体性や動作性が低くなる」も、当然すべての動詞の第V形について言えることではない。特にある語根につき第II形と第V形の両方が適用され得る場合には、具体性や動作性云々という前に、他動詞（II形）と自動詞（V形）の対応と考えた方が良い。しかし「(花が) 開く」や「(責任や義務を) 負う」、「(怖れが人を) 支配する」などのように、主語の意志や努力とは直接関係がなさそうな（それでいて、意志や努力であるように説明されてきた）第V形の意味機能を「具体性・動作性の低さ」と見ることにより、もう少し多くのV形の動詞を理解する助けとなるように思われる。

参考文献

- 池田修(第1刷1976)『アラビア語入門』岩波書店
 黒柳恒男・飯森嘉助(1999)『現代アラビア語入門』大学書林
 榮谷温子(2014)『はじめましてアラビア語』第三書館
 四戸潤弥(1996)『現代アラビア語入門講座(上)』東洋書店
 鈴木紘司(2010)『アラビア語文法解説』日本サウディアラビア協会
 新妻仁一(2009)『アラビア語文法ハンドブック』白水社
 奴田原睦明(2002)『基本アラビア語入門』大学書林
 八木久美子・青山弘之・イハーブ＝エベード(2013)『大学のアラビア語 詳解文法』東京外国語大学出版会
 BEESTON, A. F. L. (reprinted 1993) *Written Arabic -- An Approach To The Basic Structures*. Cambridge
 BROCKELMANN, Carl (1987) *Arabische Grammatik*. Max Hueber Verlag
 (Albert Socin の文法書に Brockelmann が 1941 年に手を加え自分の名前で出版したらしい)
 COWAN, David (reprinted 1995) *Modern Literary Arabic*. Cambridge
 HAYWOOD, J. A. / NAHMAD, H. M. (second ed. reprinted 1984) *A New Arabic Grammar Of The Written Language*. Lund Humphries, London
 WRIGHT, William (new impression 1974) *A Grammar of the Arabic Language*. Librairie du Liban

本稿で用いた子音のローマ字転写（アラビア文字の順）

語根	ʔ	B	T	Ṭ	J	Ḥ	Ḫ	D	Ḍ	R	Z	S	Š	Ṣ	Ḍ	Ṭ	Z	ʕ	Ġ	F	Q	K	L	M	N	H	W	Y
語根外	ʔ	b	t	ṭ	j	ḥ	ḫ	d	ḍ	r	z	s	š	ṣ	ḍ	ṭ	z	ʕ	ġ	f	q	k	l	m	n	h	w	y
Ar文字	ء	ب	ت	ث	ج	ح	خ	د	ذ	ر	ز	س	ش	ص	ض	ظ	ع	غ	ف	ق	ك	ل	م	ن	ه	و	ي	
音価	ʔ	b	t	θ	dʒ	h	χ	d	ð	r	z	s	ʃ	s	ð	t	ð	ʕ	ɣ	f	q	k	l	m	n	h	w	j

・それぞれ縦に1列ずつ同じ音を表す。「語根」は本稿中の例で語根を表すために用いられている文字。「語根外」で語根以外の部分を表している。アラビア語では語根も、本稿のテーマとなっている派生形のパターンも、形態素としてはかたまつた形で表されず、互いに間を埋め合う形で語をつくっている。

・「Ar文字」は該当するアラビア文字。ここでは独立形。

・「音価」は大体のもの。IPAであることを示す括弧 [] は、ここでは省略。

・上記の表は子音のみ。母音は a, i, u の3つと、それぞれの長母音 ā, ī, ū。